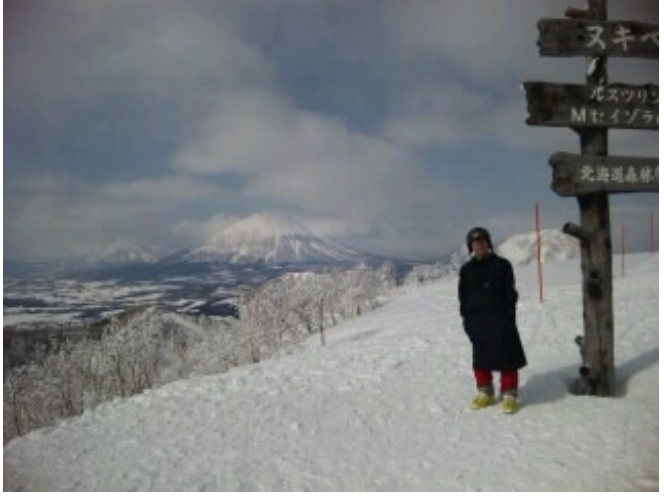

駅

たくさんの駅を覚えています。行けばいつか来たことがあったことを思い出す駅も少なくないでしょう。降りるつもりもなかったのに降りてみた駅とか駅の名前だけに興を抱いて降りたところ。

四国には「御免」という駅があって、ふと思いついて、私はそこに途中下車して、友に写真を撮らせました。御免という大きな駅表示ボードが頭上にあり、私が頭をかきなららプラットフォームの上ですまなさそうにしているところを、線路を隔てた改札ホームから撮影してもらいました。

人にすまないことをしたらこの写真を送って、「御免」という謝りの気持ちを伝えるのに使おうと思ったのです。しかし幸か不幸か今までに使うことはありませんでした。

私には探しものがありました。小学生の頃、国語の教科書で読んだ物語に出てくるチーズのような色をした月です。

そしてあなたとふたりで降りた海沿いの駅はどの町よりも童話的な景色の町でした。私は森が好きだけど海があればそれでもいいのでした。

しかし私はもうそこにとどまれなくなりました。私の探していたものは見つかりませんでした。そこは私の終着駅ではございませんでした。

あの小雨の降っていてまだ暗い早朝、誰にも見送られないでその町を去りました。私は背中に大きなリュックを背負い、手に濡れた傘と息子の手を取って汽車に乗り、がらがらの客室に・・・するとどうでしょう、私の探していたものはそこにあったのです。窓越しに雨上がりの朝の月がチーズ色をして、浮いています。しかしもう汽車は動き出してしまった。私は急いで窓を押し上げた。チーズ色の月が私たちを追いかけてきます。

汽車は汽笛をあげます。窓の外の景色がスピードを上げて移りゆくのにチーズ色の月はゆっくりと、しかししっかりと私たちに同行します。私はなんだかほっとしたような気持ちになりました。あなたを嫌いなわけではない。ただあなたの町にはもう二度と戻って来ないでしょう。

友が撮った写真を同封します。

終